

## セッションNo.6の発表に対するコメント

藤井教公

学会二日目の九月十四日、午前十時四十分から十一時二十分にかけてのセッション6では、共同研究テーマ「信仰とは何か」の下のサブテーマ、「仏弟子ということ」に沿って叡山学院の桑谷祐顕氏、立正大学の庵谷行亨氏による発表があった。二氏の発表は、それぞれ最澄、日蓮という二人の日本仏教者を取り上げて、それぞれの『法華経』受容——それは中国天台という枠組みをとおしてであるが——と、そこから導かれる信仰と弘経について論究するものであり、このたびのテーマに適った発表である。最初の発表は、

### 桑谷祐顕氏「最澄の法華経受容」

である。桑谷氏の発表は、「最澄は自らを天台大師の後身と自認したが故に、その生涯は靈山同聴の天台大師の教法を敷衍する如来使としての生涯であったことを検証する」ことを目的とするものであるという。これまでの先行研究で、最澄を如来使として捉える論はほとんど無いといってよいだろう。わずかに故浅井円道氏が最澄を『法華経』の行者として捉え、『法華経』と最澄との関わりの様相を捉えているくらいである。また浅井氏は、最澄と日蓮の宗教体験の類似性についても論じている。このような背景にあつて、桑谷氏は、最澄の生涯を通観してみると、仏出世の

本懐である『法華経』の流通を目的とし、その教化流通を生涯の使命とした「如来使」としての自覚と行動が最澄の中に見えてくるという。周知のごとく「如来使」とは『法華経』法師品に説かれる如来の代行者で、仏に代わって衆生教化という如来事を行う者であり、『法華経』では従地涌出品に説かれる地涌の菩薩のことである。

それで氏は、上記の目的について、

①最澄が自身を如来使であると自覚していたこと、

②最澄が自身を智顛の後身であると自覚し了得していたこと

の二点に分け、それを資料によって裏付けされている。

まず①については、最澄が天台大師を如来使であると受け止めていたことが、『守護国界章』『法華秀句』や『依憑天台集』の資料によって示される。また、天台智顛が如来使であるならば、靈山同聴の南岳慧思も当然、如来使であると最澄に目されていたとする。ここまでは客観的な資料によって裏付けられている。しかし、次の段階、すなわち最澄自身が如来使であると自覚していたことを裏付ける資料については少々微妙なところがある。それは最澄自身の著作の中に、自身が如来使であるという自覚を表明する記述が見当たらないということである。この点が日蓮と相違するところであるが、最澄の場合はその典拠は『道邃和尚付法文』と一乗忠の『叡山大師伝』中の行満和上の付法の箇所の記述、それと「行満和上印信」とに委ねられる。

②に関わることであるが、『道邃和尚付法文』では最澄が智顛の後身であり、如来使であることが、道邃の言として述べられており、また『叡山大師伝』中には行満和上が語ったこととして、天台大師が示寂の時、二百年後に東国に生まれ変わると言われたが、今その人（最澄）に遭ったということを書き、次に「行満和上印信」を引用している。

しかし、現存の「行満和上印信」を見ると、行満が最澄を如来使とする直接的記述はないし、また智顛の生まれ変わりとする記述もない。『叡山大師伝』が記す最澄が智顛の後身であると述べた行満の言は、『道邃和尚付法文』の内容と似通っている点から考えると、伝の作者一乗忠が『付法文』の影響を受けて付加したものではないかという推測も成り立つ。また、これは発表者の桑谷氏自身も懸念を表明されているように、『叡山大師伝』中に行満の「印信」の引用はあるが、道邃の『付法文』の引用はない。この『付法文』の現物とされるものは延暦寺にあり、国宝の指定を受けているが、また桑谷氏が指摘されるように、かつて三浦義薫氏によって偽作説が出されたことがあった。ということで、資料的に一点の疑惑を拭いえない。最澄が如来使であるということや直接的に記しているのは『道邃和尚付法文』と『叡山大師伝』とであるが、上記のことを考慮すると、この二書の記述に全面的に信が置けるかといえ、これはなかなか難しい問題である。しかし、最澄が如来使であるということや最澄が智顛の後身であるという直接的記述のない行満の「印信」でも、「經今二十餘祀。諸無可成。忽逢日本國求法供奉大德最澄法師。云親辭聖澤。面奉春宮。求妙法於天台。學一心於銀地。不憚勞苦。遠涉滄波。忽夕朝聞。忘身爲法。觀茲盛事。亦何異求半偈於雪山。訪道場於知識。且行滿傾以法財。捨以法寶。百金之寄。其在茲乎。」（『伝教大師全集』第五卷、附一一四）というような内容記述からすれば、発表者の提示された結論は状況証拠的には言いうることであろう。確実なことは、桑谷氏が言われるように、一乗忠などの初期日本天台の大師近侍の弟子達は「最澄如来使」を了知していたということである。

また、桑谷氏は最澄の「天台法華宗」の開創が単なる「法華經宗」でなく天台と付してあることが、自身が天台の直授相承・如来使たる天台大師の法華經解釈に基づく宗であることを証明しているといわれる。この点について、発表後の質疑応答で、東洋大学の伊吹敦氏から、最澄は、天台・密教・大乘戒・禪法の四種相承をいうので、天台のみ

を強調するのはいかがかという質問があり、それに対して発表者は、行滴が最澄に会った時、彼こそが天台大師が二百年後に東国に生まれると予言したその人物と思えばこそ、大量の典籍を彼に渡したのであると答えられた。また、当日配布された詳細なハンドアウトには、後半の「五」と「六」に天台の法華教判が妙円独秀であることと、最澄のとらえる『法華経』の特徴、最澄『法華経』観についての資料が挙げられていて有意義であった。氏の発表は詳細で熱意のこもった発表との印象を受けた。

次の発表は、

### 庵谷行亨氏「日蓮における仏弟子の自覚」

である。二〇二二年度のテーマ「仏弟子ということ」にびたりと焦点が合わされた発表である。庵谷氏は、「日蓮は虚空会上において、付属を受けた者としての自覚に立つて法華経を弘通した。その仏事の履行が、日蓮にとつて真に仏弟子として生きるこの意味でもあった」と述べ、仏弟子としての自覚が「仏法の弘通は仏弟子の使命であるとの自覚」に繋がり、法華経の弘通にその生涯を賭けたと説く。その仏弟子との自覚は『法華経』の従地涌出品第十五所説の上行菩薩としての自覚であり、それに基づいて如来神力品別付属の主體的受容がなされているとする。

そして「法華経弘通の身に興起する値難こそ真の法華経の行者の証であるとの信解」を懐き、日蓮が自身の値難によって自身が日本第一の『法華経』の行者であり、自身は『法華経』を色読したものであるとの確信を懐き、値難によって逆に法華経真実の証明がなされると考えたとする。

そして日蓮は「知教者」として、その使命を果たすことについて、「知れる者日蓮一人」の自覚と値難弘通の覚悟

を経て「言うべしとの決断と値難の覚悟」をしたという。この「知教者」という語は、日蓮の『教機時国鈔』における用語で、『法華経』と余経との区別を弁別できる者、経の本意を知る者の意である。この「知教者」としての自覚が取り上げられているのは、それによって日蓮の宗教的人格の描写をより深められるとされたからであろう。

また、これは桑谷氏の発表を聞いた後での筆者の無い物ねだりではないが、日蓮自身が「上行菩薩の再誕」「如来使」との意識を有していたことを強調していただけたならば、最澄の場合と比較して、日蓮の法華経の行者としての意識が聴衆により明確に伝わったことであつたらうと感ぜられたことである。

また、この最澄、さらには遡って天台智顛と日蓮との比較において、庵谷氏がすでに提示されている、天台伝教も遭わなかつた刀杖瓦石の難に日蓮が遭つたという資料、『南条兵衛七郎殿御書』、『開目鈔』以外にも、同様の文章、『上野殿御返事』の「次に勦持品に八十万億那由佗の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり。誰か出でて、日本国・唐土・天竺三国にして、仏滅後によみたる人やある。又我よみたりとなるべき人なし。又あるべしとも覺へず。及加刀杖の刀杖二字の中に、もし杖の字にあう人はあるべし。刀の字にあひたる人をきかず。不輕菩薩は杖木瓦石と見たれば、杖の字にあひぬ。刀の難はきかず。天台・妙楽・伝教等は刀杖不加と見たれば、是又かけたり。日蓮は刀杖の二字ともにあひぬ。剩へ刀の難は前に申がごとく東條の松原と龍口となり。一度もあう人なきなり。日蓮は二度あひぬ。杖の難には、すでにせうぼう（少輔房）につらをうたれしかども、第五卷をもてうつ。うつ杖も第五卷うたるべしと云経文も五卷、不思議なる未来記の経文也。」などがあれば最澄との相違がより際だつてくるのではないかと思われた。

また、同様に、日蓮が値難の原因として、『開目鈔』には「我無始よりこのかた悪王と生て、法華経の行者の衣食田

畠等を奪とりせしことかずしらず。当世日本の諸人の法華經の山寺をたうすがごとし。又法華經の行者の頸を刎こ  
と其数をしらず。此等の重罪はたせるもあり、いまだはたさざるもあるらん。果も余残いまだつきず。生死を離時は  
必此重罪をけしはて、出離すべし。功德は浅軽なり。此等の罪は深重なり。（中略）今ま日蓮強盛に国土の謗法を責れ  
ば大難の来は、過去の重罪の今生の護法に招出せるなるべし。」〔昭和定本〕第一卷 六〇二頁）とあり、このような  
値難に対する日蓮自身の深刻な反省があつた点が付加されれば日蓮の人間性がより浮き彫りにされると思われる。し  
かし、庵谷氏によつて配布されたハンドアウトの分量は二十頁にも及び、発表時間は二十分であるからこれは無理な  
注文といふべきであろう。

総じて桑谷、庵谷両氏の発表は学会のテーマに適い、詳細でかつ明快、熱意に満ちたものであつた。